

1-1 「認知的ソーシャルキャピタルと健康についてのシステマティックレビューの現状」

研究分担者 安福 祐一 （大阪大学 大学院医学系研究科 医療データ科学共同研究講座）
研究協力者 竹内 寛貴 （千葉大学予防医学センター 社会予防医学研究部門）

研究要旨：本研究の目的は、認知的ソーシャルキャピタルが健康に与える影響について報告した国内外のエビデンスをレビューし、認知的ソーシャルキャピタルが健康に与えるインパクト及び認知的ソーシャルキャピタルの評価の実態や課題等について明らかにし、認知的ソーシャルキャピタル指標の選択時に参照することが可能な基礎資料の構築を行うことである。地域在住者を対象として、地域の人々との関係性に関する認知的ソーシャルキャピタルの状態およびその醸成を図る介入と健康・Well-being との関連について検討した Systematic review を収集する検索式を作成し、MEDLINE を用いた論文検索を実施した。スクリーニングの結果、最終的に計 13 本の論文が適格だと判定された。低中所得国を含む多様な国、多様な人種に関する報告が存在し、研究デザインの主体は観察研究であったが、一部介入研究等の存在も確認された。認知的ソーシャルキャピタルは、精神的健康を中心として、身体的健康、健康格差・健康の不平等等について保護的な影響を与えうることが示唆された。一方、適格論文の多くが横断研究であり、健康日本 21（第三次）が掲げる健康寿命などのエビデンスは限定的であった。本レビューは、今後健康日本 21（第三次）の認知的ソーシャルキャピタル指標の選定や評価結果の解釈に際して基礎資料としての活用が期待できる。

A. 研究目的

ソーシャルキャピタル（Social Capital）は、ネットワークやグループに属することで個人が得られるリソースと定義され、一般に「認知的ソーシャルキャピタル」と「構造的ソーシャルキャピタル」に大別される（Berkman et al., 2014）。認知的ソーシャルキャピタルは、コミュニティに対する「信頼」や「互酬性」「愛着」などの認識や態度を指し、構造的ソーシャルキャピタルは、社会参加や社会的ネットワークそのものを指す。近年、高齢者の健康増進や幸福度（well-being）の向上のために、認知的ソーシャルキャピタルが果たす役割が注目されている。健康日本 21（第三次）では、「地域の人々とのつながりが強いと思

う」という項目を指標とし、認知的ソーシャルキャピタルの向上を目標としている。一方、健康日本 21 第 2 次の最終評価報告書では、ソーシャルキャピタルについて「健康指標と関連するのか、予測妥当性等に関する科学的知見があるのか明らかではない」と指摘され、領域全体の課題として、「今後の指標の設定に当たっては、エビデンスに基づいて健康寿命等、健康日本 21 が掲げる指標と関連のあるソーシャルキャピタル指標を検討することが望まれる」とされている。認知的ソーシャルキャピタルと健康・Well-being との関連について集約および整理された情報は世界的にも不足しており、そのエビデンスの集積状況について整理をするための追加的な検証が必要な状況にある。本研究の目的は、認知的ソ

ーシャルキャピタルが健康・Well-being に与える影響について報告した国内外のエビデンスをレビューし、認知的ソーシャルキャピタルが健康・Well-being に与えるインパクト及び認知的ソーシャルキャピタルの評価の実態や課題等について明らかにするとともに、認知的ソーシャルキャピタル指標の選択時に参照することが可能な基礎資料の構築を行うことである。

B. 研究方法

本レビューの実施にあたり、認知的ソーシャルキャピタルに関する既存のシステムティックレビューを収集する検索式を作成した。論文の適格基準は、有病者を含む地域在住者を対象として地域の人々との関係性に関する認知的ソーシャルキャピタルの状態およびその醸成を図る介入と健康・Well-being との関連について焦点を当てたシステムティックレビューとし、除外基準は構造的ソーシャルキャピタルやそれ以外の介入に関するシステムティックレビュー、スコوپングレビューやアンブレラレビュー、そしてランダム化比較試験などの個別研究に関する論文とした。言語は英語とした。検索データベースとして MEDLINE を用いて 2024 年 11 月に論文の検索を行い、抽出された論文について 2 名の研究者が独立して 1 次スクリーニングを行い、2 次スクリーニングの対象論文を選定した。さらに、同じ 2 名の研究者が該当した論文のフルテキストを収集した。

(倫理面への配慮)
非該当

C. 研究結果

本研究結果は現在投稿準備中の論文で扱っているため、本報告書では概要の記載にとどめ、詳細は来年度報告書で報告予定であ

る。

MEDLINE での論文検索の結果、1,981 本の論文が抽出された。スクリーニングの結果、最終的に 13 本の論文が適格だと判定された。適格論文について、対象国は日本、米国、英国、北欧諸国などの先進国から低中所得国まで多岐にわたり、地域在住高齢者、移民・難民、子ども・青少年、妊婦、および特定疾患患者などの多様な集団が分析された。研究デザインの主体は観察研究であったが、一部介入研究等の存在も確認された。個別研究のバイアスリスクについては、JBI チェックリストや Cochrane の基準のほか、先行研究の方法に準じた評価が実施されていた。レビューの質やエビデンスの確実性については、多くの研究で報告がなされていなかった。

論文中で評価された認知的ソーシャルキャピタルには、一般的な他者への信頼、近隣住民への信頼、制度・機関への信頼、医療従事者への信頼、不信感の欠如、互酬性の規範、近隣住民との助け合い、利他主義、相互扶助の認識、近隣への所属感や愛着、コミュニティ意識、社会的結束、共通の価値観の共有、アイデンティティの認識、家族内の結束、近隣環境の安全性、犯罪や暴力に対する不安のなさ、夜間歩行の安全性、学校の安全性、情緒的・情動的サポートの認識、潜在的な社会的サポート、親による関心の知覚、社会的結束と共同で介入する意思、近隣問題への共同対処意欲、インフォーマルな社会統制、地域の協力体制、主観的な社会的孤立感、孤独感、近隣満足度、人生の目的、市民的責任感、エンパワーメントの認識、意思決定への関与意識、などが確認された。

適格論文において検証された認知的ソーシャルキャピタルと健康状態との関連については、精神的健康（抑うつ・不安の発症リスク低下、集合的効力による抑うつ抑制等）、身体的健康（口腔健康、睡眠、ヘルスリテラシー、母子保健等）、健康格差

(社会経済的不利の健康影響の緩衝効果)と関連すること、農業活動・家庭訪問・歌唱グループ等の介入により認知的ソーシャルキャピタルが醸成可能であることが報告されていた。一方、適格論文の多くが横断研究であり、健康日本 21 が掲げる健康寿命などのエビデンスは限定的であった。

D. 考察

本アンブレラレビューでは、認知的ソーシャルキャピタルの状態あるいはその醸成を意図した介入が個人レベルの健康に与える影響についてのエビデンスを収集し、計 13 本の適格論文について記述的に要約した。

特に、精神的健康・身体的健康・健康格差・介入による醸成可能性という多面的な領域で、認知的ソーシャルキャピタルが健康・ウェルビーイングに保護的・促進的に寄与するエビデンスが集積していることが確認された。特に、社会経済的不利の健康への悪影響を緩和する緩衝効果が示唆された点は、認知的ソーシャルキャピタルを行政指標として位置づける妥当性を支持する重要な所見である。

一方で、本レビューに含まれる適格論文の多くが横断研究であり、認知的ソーシャルキャピタルと健康アウトカムとの間の厳密な因果関係の特定には慎重を期す必要がある。また、死亡率や心血管疾患などのハードエンドポイントに対する認知的ソーシャルキャピタルの影響については、現時点では証拠が限定的であった。これは、主観的認識が臨床的なイベントに影響を及ぼすまでには長期的な暴露が必要であることや、既存の測定指標の不均一性が影響している可能性がある。今後の研究においては、標準化された測定ツールを用いた縦断的な検討に加え、認知的側面が物理的環境とどのように相互作用するかというマルチレベルな視点からの解析が求められる。

E. 結論

本研究を通じて作成されるレビューは、世界的に見ても情報の集約が進んでいない認知的ソーシャルキャピタルと健康・Well-being との関連についてのエビデンスの現況を整理した資料として、今後健康日本 21 の認知的ソーシャルキャピタル指標の選定や評価結果の解釈に際して基礎資料としての活用が期待できる。

引用文献：

1. Berkman LF, Kawachi I, Glymour MM. Social Epidemiology, Second Edition. Oxford University Press 2014. <https://doi.org/10.1093/MED/9780195377903.001.0001>.

G. 研究発表

1. 論文発表
なし
2. 学会発表
なし

H. 知的財産権の出願・登録状況 (予定を含む。)

1. 特許取得
非該当
2. 実用新案登録
非該当
3. その他
非該当